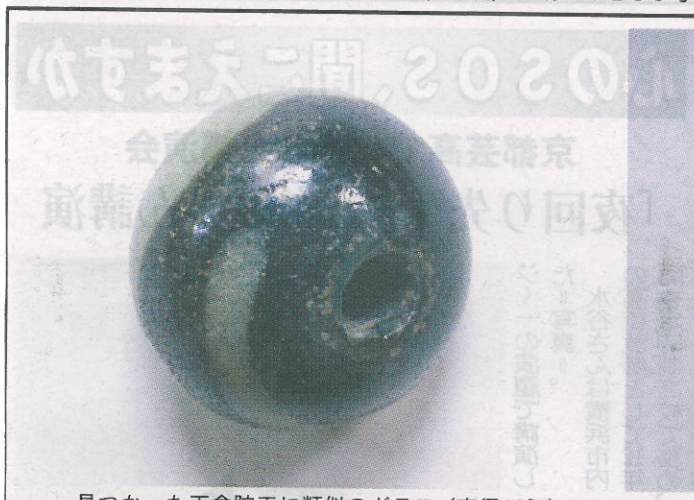

見つかった正倉院玉に類似のガラス（直径16ミリ）

見つかった奈良時代タイプのガラス（直径9・9ミリ）

見つかった平安時代タイプのガラス（直径6・7ミリ）

平安最古のガラス玉を発見

平等院鳳凰堂

浄土の荘厳、科学的に立証

正倉院と同系物も　藤原氏一族伝来の遺品?!

世界遺産の平等院（宇治市宇治蓮華）で本尊の阿弥陀如来坐像（国宝）の台座から見つかったガラス玉を詳しく分析した結果、平安時代のガラス玉であることがわかった。平安時代のガラスは中尊寺金色堂（1124年建立）伝来の2点が残るのみで、9世紀から11世紀のガラス資料はなく、台座から見つかったガラス玉や瓔珞（ようらく）と呼ばれる青、緑色系統のガラス玉に飾り金具を組み合わせた垂れ飾りはガラス史の空白を埋める貴重な資料になりそうだ。

化学分析を担当した中井泉さん（東京理科大学応用化学科教授）、日本ガラス工芸学会会長の井上曉子さん（東海大学大学院非常勤講師）が24日に平等院で記者会見し、今回の発見の意義について説明した。

平等院は関白の藤原頼通が父道長の別荘を寺院に改め、平安時代後期の永承7年（1052）に創建。古くから「極楽いぶかしくば宇治の御寺をつやまへ」と詠まれ、現世の極楽浄土としてあがめられた。

本尊の阿弥陀如来坐像（国宝。像高2・8メートル、重さ約250キロ）は仏師定朝が製作。寄木造りというわが国独自の完成された技法や様式を取り入れたその時代を代表する文化遺産として名高い。

「平成の大修理」（2003年～07年）では本尊を半世紀ぶりに修理。台座（高さ約1・8メートル、ヒノキ製）の中層に位置する華盤（けばん、直径約2・4メートル、厚さ約15センチ）の中から本尊のまばゆい世界を表わしたと見られる青や緑色のガラス玉や螺鈿（らでん）など多数の装飾品が見つかった。

見つかったガラス玉のうち、調査可能な186個を蛍X線分析し、そのうち40個の密度測定したところ、いずれも多量の鉛を含む高鉛ガラスで、全体の9割が平安タイプと呼ばれる「カリ鉛ガラス」で、1割が奈良時代に由来する奈良タイプと判明。

奈良タイプのうち3点（直径は13ミリ～16ミリ）は正倉院御物のガラス玉と組成やつくり方もほぼ同一で、数珠として使ったガラスが伝わり、いずれの時期かに平等院に納入されたと考えるほうが妥当な正倉院伝来のガラス玉の可能性が高まった。

正倉院御物は天平勝宝8年（756年）、聖武天皇の遺愛の品と薬物を妻の光明皇后が東大寺の大仏に奉献した宝物。

光明皇后は藤原不比等の娘にあたる。藤原氏の氏神として不比等が建立した興福寺からは奈良時代のガラス玉が見つかっており、平等院から見つかった正倉院御物ゆかりのガラス玉は、奈良時代から300年の時空をたどる文化史を読み解く上でも新たな資料を提供しそうだ。

【岡本幸一】

平等院ガラスが見つかった本尊・阿弥陀如来坐像とその下部に位置する台座
＝写真はすべて平等院提供＝